半生

竹本祥子

欠片がパラパラとおちたのは
気のせいだったのか
まだ　成長しきらない
五十路の女の躰体から
溢れだす
怨念とも
邪気ともつかない
粋色の
香典返しのような
パヒューム・ミュゲノート
葉っぱに丸めて
楊枝でさして
大切にしまい
かりてきた
衣装のような
あつらいの
ココロから
出てくる
数々の言葉たち
口を結んで
嗚咽される
弧の魂が
ゆらめくとき
何物にも
邪魔されない
ワタクシが
存在する

水を含んで
言葉をつまんで
垂れ流される
淫靡な誘惑を
四肢に絡めながら

黄色い嘴を
暗喩にくるめて
努力だけを
買ってはくれないかと
売女になってはみたものの
国道一〇号線の
ピンクな看板の
二〇年前の構築物の基礎が
こわれてゆくと
文句をつける
　　あぁ姉ちゃん・・・・・・
　　妹が何かを言っているけれど
　　聞き取れない
　　もう三人の子供たちも独立するからね
妹はすでに
わたしの何倍も生きた
何倍もの生は　もはや
わたしにはやってはこないだろうけれど
己の手を見
己の手の先の爪を見
顔の皺を見て
互いに寿げればと
紙ヒコーキをとばす

いのちという欠片が消えないうちは
エプロンの紐を結び
それでもミュゲノートを
振りかけながら
ワルツを踊る